

った個性がみうけられる。

性格傾向との関連はぬり方に最もよく表れるようである。濃く強くぬる子は自我が強く、家庭環境でわがままであるか抑えつけられているかしており、中等度に均一にぬる子、考えて強弱をつける子は温和な平衡のとれた性格傾向をもつ。筆勢の点でかき放すものは明るいがき大將型で知能はあまり高くないが、しばしばリーダー格に推される子である。

一色または二、三色を好んでつかうものは一般に外向的であるが、紫や茶色の好きなものには内向性の子も交っており、暗い濃い色を多く使うものは、内向性である上に強い性格である。しかし、考えられているほど色彩と性格傾向とは相関しないともいえるようである。明るい子でも、紫や茶色をかなりしばしば使っている。

最もはつきりうけとれたものに健康との関連であって、色彩、筆勢、及び形の完結度ははつきり健康状態とつらなっている。紫、黒、茶が注意をひくほど用いられた画は、殆ど一〇〇%胃腸の悪い子の、または胃腸障害を起した時の画であった。発熱や呼吸器系の障害の場合は筆勢が著しく弱まっているし、形の完結度も低い。

これらの事情を総合するに、幼児の自由画は、題材の点から見て主として意識的活動であると同時に、好めるもの、たのしき経験、又は希望を描くのが第一義的なものであって必ずしも、潜在的欲求の昇華ではないということである。周囲の社会的環境や人的環境の影響、絵本の影響などもかなりはつきりと形にあらわれる。色彩なども、案外に常識的なものの方が多い。

知能や健康のような基礎的条件はやや作品にあらわるが、それと

でも決定的なものとは言いがたいと思われる。いったい、特殊な例外のほかは、画をかくほどの時、子どもは抑圧の解放などというよりははるかに意識的な構成的な表現活動をしているのである。従って、生活感情もどちらかといえば、明るい面、積極的な面しかあらわれないことが多い。暗い面を出すようなときは、先づかかないのがふつうである。自由画に子どもの生活のかくれた面がひそむのを見出すことができる場合は、たしかに存在するが、子ども自身が意図していない感情までも自由画からよみとろうとする傾向をもつことはつつしみたいと考える。ありのままをありのままにうけとると、理由づけをしなくても大切な保育者の態度だと思ふ。

幼児画の指導について

新宿区立牛込仲之幼稚園

友田 静恵

年少組の時には個性豊かな絵が描けたのに、年長児になるに従って、幼稚園式自由画とでもいおうか、概念的、固定的なものになり、女兒はチューリップと人、男児は乗物と画材と表現形式が固定していく傾向がある。これは教師の指導が適切でなかったのではないか、又そこには幼児特有の心理的なものがあるのではないか、もしそのようなものがあるとすれば、どのような指導をしたらよいか、正しい描画の指導はどう在るべきかを考えてみたい。

幼児画の指導にあたり、先ず知っておかなければならない事は、描画の発達段階である。身体の発達と同様描画にも、発達の段階が

ある事は周知の事である。

錯画の段階、図式画の段階、立体画の段階とそれぞれの発達段階があるが、自分が今指導している幼児はどの段階にあるかを知り、個々の幼児に適應した指導をしなければならない。ぬたくりの時期にある幼児を、いきなり立体画の段階に引き上げようと無理をするから、形にはまった概念画になる。大人概念で人はこう描くのですよ、自動車はこうと形を教えるので、子供は自分で感じとったものを押さえられ、形の模倣だけに終り、何を描いても大人から教えられた概念的なもののばかりを記憶の中からひっぱり出して形式的に描くようになる。何故チューリップや人形、乗り物に固定されるのは、大人からくりかえし教えられて、これだけは自信を持って描けるのと、自分たちの生活の中にある親しみやすいものであるのと、周囲の人からよく描けたと認めてもらえるからなのである。

概念的になる今一つの原因は、友達や兄弟からの影響もある。バードデイの折、十姉妹を描かせて、絵の先生に見ていただきましたら、「これを分類してみましよう」とおっしゃって、形式の似たようなものを分類したが、はつきりとグループ別に分けた。ある一人の幼児が小鳥らしく見えるものを描いたら、あとの子は皆まねをして描いたのだ。このように幼児は模倣性が強く、他からの影響も大きいのですから、何時も同じグループにおくことは、絵を固定させる原因になる。一月に一回位グループを替える方がよい。

概念的、固定的な絵から抜け出させるためには生活経験を豊かにさせる事が大切である。これは常識論のようだが、描画活動には特に必要な事である。幼児は直接経験を通して、感覚を身につけ、表

現力も成長するのでいろいろなものをもてあそばせたり、みさせたりして作らせたりして造形物に対する感覚をいつも、新しくさせ画像を豊かに持たせることなどが創造的な絵が描ける素地を養うことになる。

只何んでもよいから自由に描いてごらんなさいといっていたのでは、中々描けるものではない。この自由という言葉の美しいひびきに迷わされて、私達は絵の指導を放任しておく場合が多かったのではないであろうか、ある絵の先生は幼児の絵は特に指導しなくてもよい、綺麗な色のセーターをきて傍でみていればよいと申されましたがこれは理想論であって、この理想に近づけるようにする事は大切であるが放任はいけないと思う。自由画の指導が今迄あまりなされていなかったので、偏った表現が多かったようだ。よく躰をする場合にくりかえしくりかえしという言葉が使われますが、自由画の指導には、描かせる場の一つ一つが新しい面の開拓をなし、一歩々と前進していくように、適当な時に適当な助言が大切である。助言というのは技巧や表現の方法を、幼児に教えるのではなく、描いているうちに幼児自らが、その方法を発見するように助けてやる事だ。

描く前に話し合いによって、画想をまとめさせるとか、人形劇や紙芝居の面白かった場面を描かせるようにすると、幼児の興味を育てつつ夢のある、創造力豊かな絵がかかるようになる。楽しかった行事の印象画を描かせる方法も効果がある。

「昨日遠足にいきましたね、何に乗っていったでしょう、そう、觀光バスでしたね、麦畑のところを通って広い野原へ出しましたね、ひばりも鳴いていました」などと経験を通して、その強い感銘から表

現しやすういように導く。つまり幼児の心にあるものを引き出してやるように仕向ける。又自由画ばかり描かせますと絵が偏よるから、時々画題を指定してやる。画題を指定する場合には描きたくなるような、雰囲気を作ってやる事が大切であるが、指定画ばかりでは自発性をなくし、「先生今日は何をかくの」と指図なしでは描けなくなるので注意が肝要である。

室内の環境も表現の材料となるので新聞の写真を掲示したり美しい花を飾ったり、日除けのカーテン、黒板のカーテン等も美しいアップリケをしておく、それからヒントを得て描くのである。

幼児の作品も同じものを永く貼っておくとそれからも概念づけられるから、描いたあとは、鑑賞させる程度にしておくか、たえず新しいものと取り替えるようにする。

幼児の絵はその生活に結びついて、表現されるものだという事を認識して、その時代のレデネスに適した、夢や空想が表現出来るように指導する事が、概念画から抜け出す最良の方法だと思ふ。

幼児の絵画指導に

関する基本的研究

—自由画による幼児の絵画概念固定化
に関する一実験—

栄光幼稚園 日名子太郎

幼稚園における絵画は、それを通じて幼児の創作的表現に対する興味を養い、創造性を培うことにありとされて居る。今迄の教育方法は確かに幼児の創造能力を萎縮せしめ、絵画概念を固定化する傾向のあった事は事実であろう。そしてこの弊害から免れる為、一切の技術指導を排せるこの方法論を生じて事も当然であると云えよう。子供達が明るく生々と自由にその生命力を表現し得たらどんなにか楽しい事であろう。しかし、表現力を教える事なしに自らの力で発見させ、その様な環境と雰囲気を整える事で果して幼児の創造力が培われるであろうか。私は今迄の経験から、この点に疑問を持ち、実験により、配色、題材について概念固定化の傾向を数量的に把握しようと試みた。以下、その方法と結果を報告する事とする。

1、対象 二年保育年少組(三十四名)

2、期間 一九五四年六月より一九五五年三月まで合計六十回

3、条件 絵画に関する一切の技術指導は除外し、家庭及び幼稚園における環境は可能な限り整える。

3、材料 クレパス十五色画

画用紙の大きさ 210×140 (白色)

但し途中二回だけ 210×280 を使用

5、被験者 第一表右欄参照のこと。

以上の条件で描かれた自由画をその配色、題材について見る為、その絵の主要な配色の色彩番号(これを第一次色彩要因と呼ぶ)及び使用全色彩番号を記録する。題材は、その都度、児童に何を画いているか、又何を書いたかを問ひ記録する外、これに実験者の観察結果も含め記載する。これらを六、七月の第一期、九、十月の第二期